

①現状(航空写真)

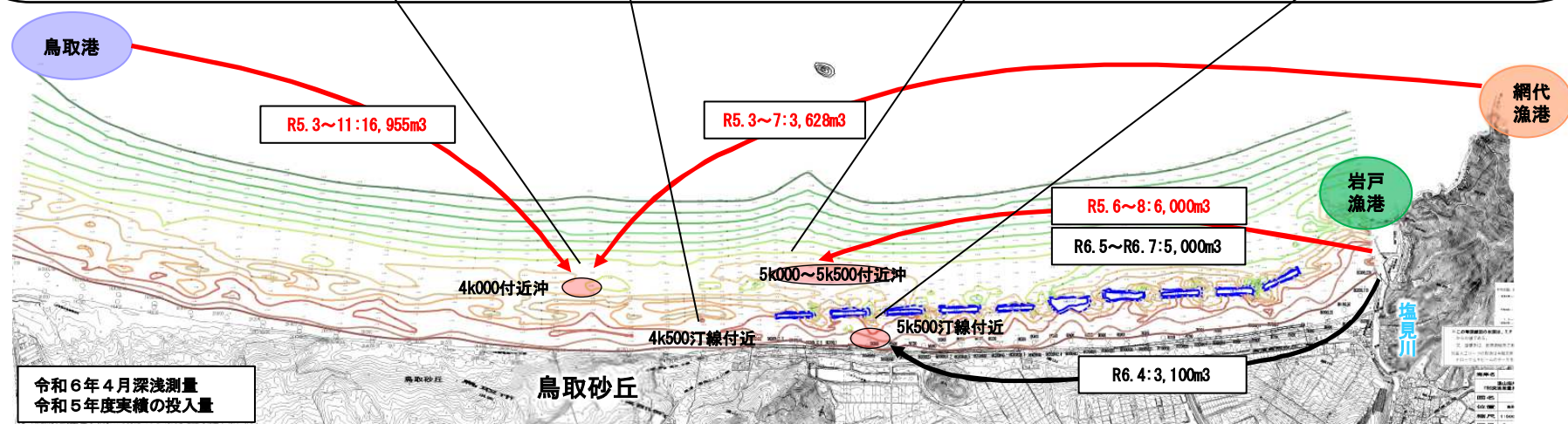
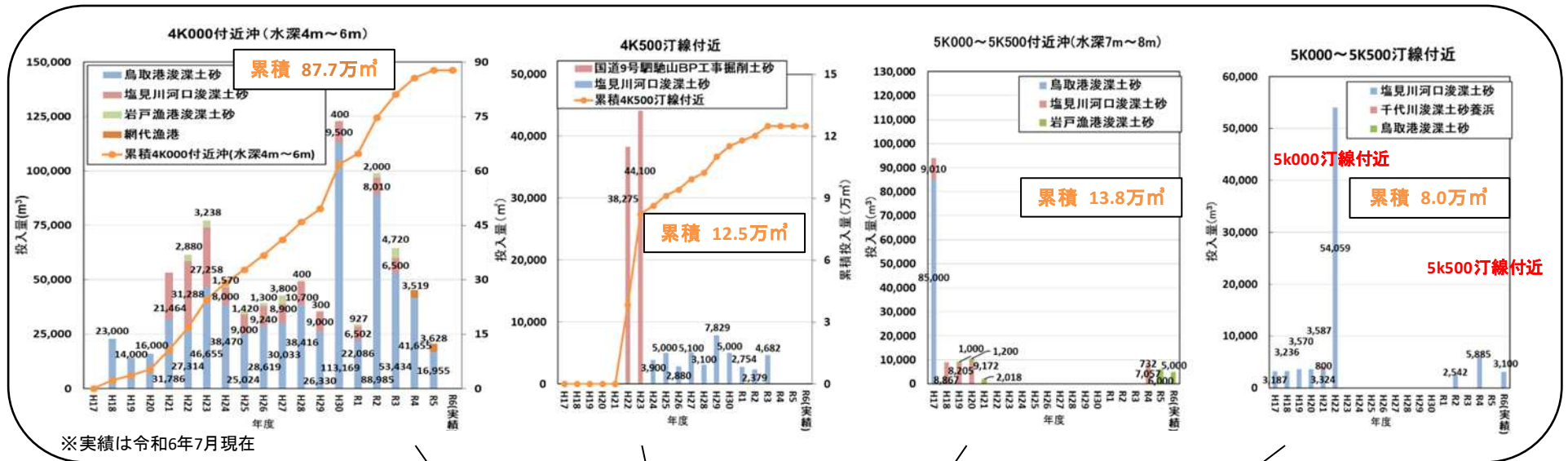
千代川右岸²³

令和6年12月2日撮影



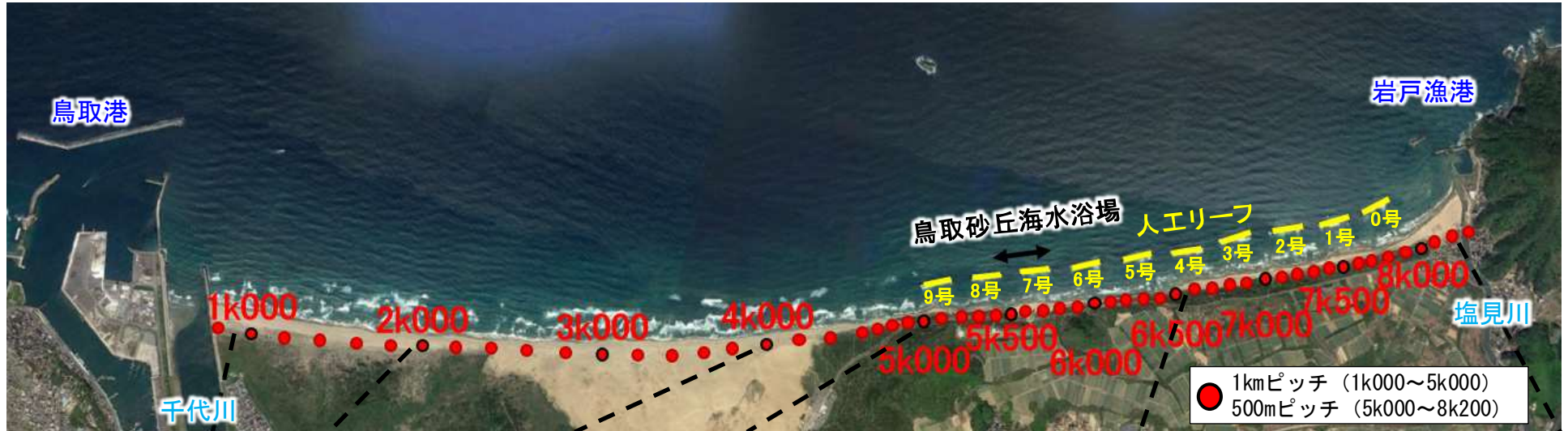
②現状(サンドリサイクル実績)

- 4k500汀線付近へ陸上養浜していた土砂の一部を、令和2年度から5k500汀線付近にも投入するようになった。また、4k000付近沖への投入が継続されつつ、令和4年度から東側の侵食対策として5k000～5k500付近沖に土砂投入されている。
- 鳥取砂丘(4k000)沖では平成18(2006)年度から令和6年7月までに、累積87.7万 m^3 、鳥取砂丘汀線(4k500)付近では平成22(2010)年度から令和6年7月までに、累積12.5万 m^3 の土砂投入が行われてきた。



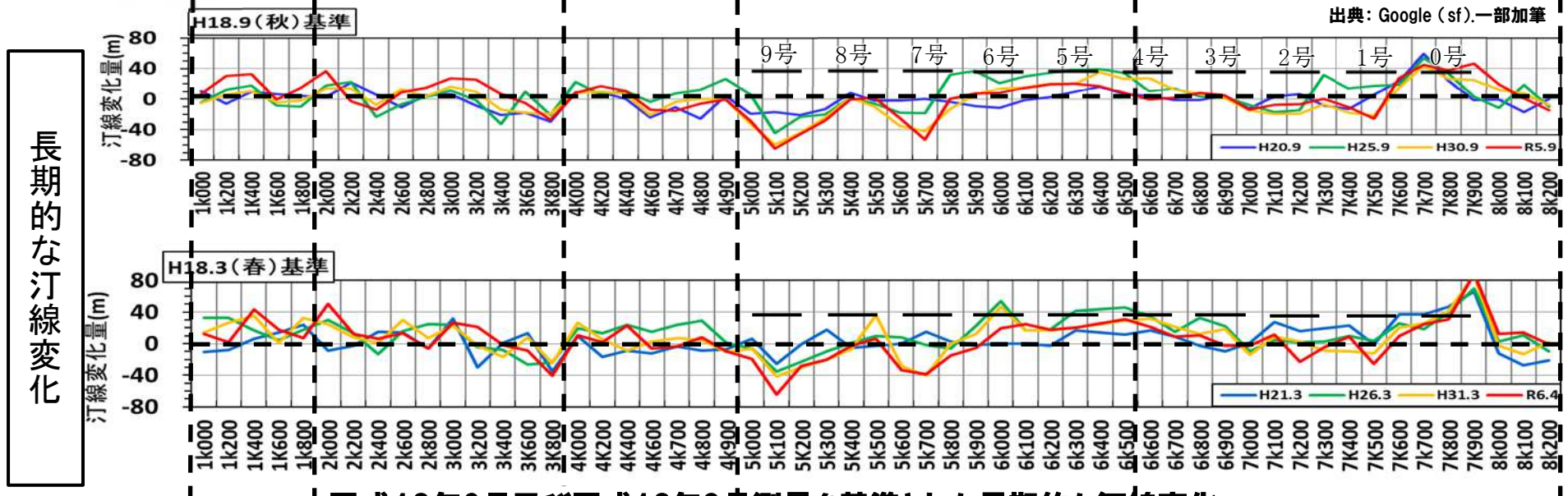
③現状(長期的な汀線変化)

長期的な汀線変化：人工リーフ西側(5k000~5k800)の汀線は経年的に後退傾向である。
 他区間は、基準線を挟んで局所的な汀線前進後退が見られるが概ね汀線を維持している。



● 1kmピッチ (1k000~5k000)
 ● 500mピッチ (5k000~8k200)

出典：Google (sf).一部加筆



平成18年3月及び平成18年9月測量を基準とした長期的な汀線変化

※測量基準年は、サンドリサイクル事業を開始したH18(季節毎)を設定

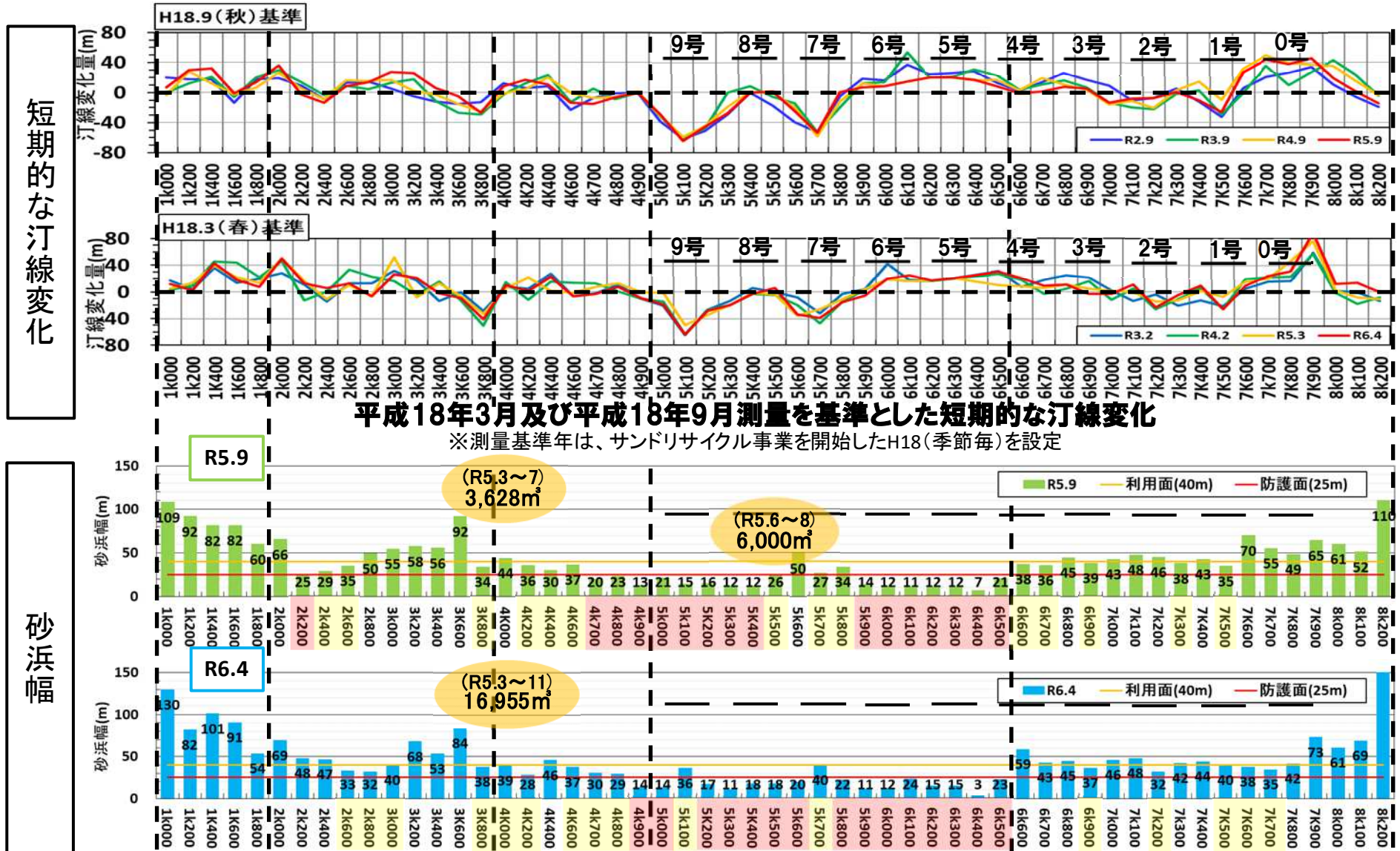
長期的な汀線変化

④現状(短期的な汀線変化・砂浜幅)

千代川右岸²⁶

短期的な汀線変化：近年は全体として、同程度の汀線変化傾向を示しており、人工リーフ西側(5k000~5k800)は汀線後退が続いている状態である。

砂浜幅：人工リーフ西側の半数以上の測線が防護面の目安浜幅(25m)を下回っている。



※1k000~4k600の間は測点200mピッチ
 4k600~8k200の間は測点100mピッチ

令和5年9月及び令和6年4月測量時の砂浜幅

※赤色ハッチ: 防護面の目標浜幅25m以下
 黄色ハッチ: 利用面の目標浜幅40m以下

⑤土砂量変化分析(中期)

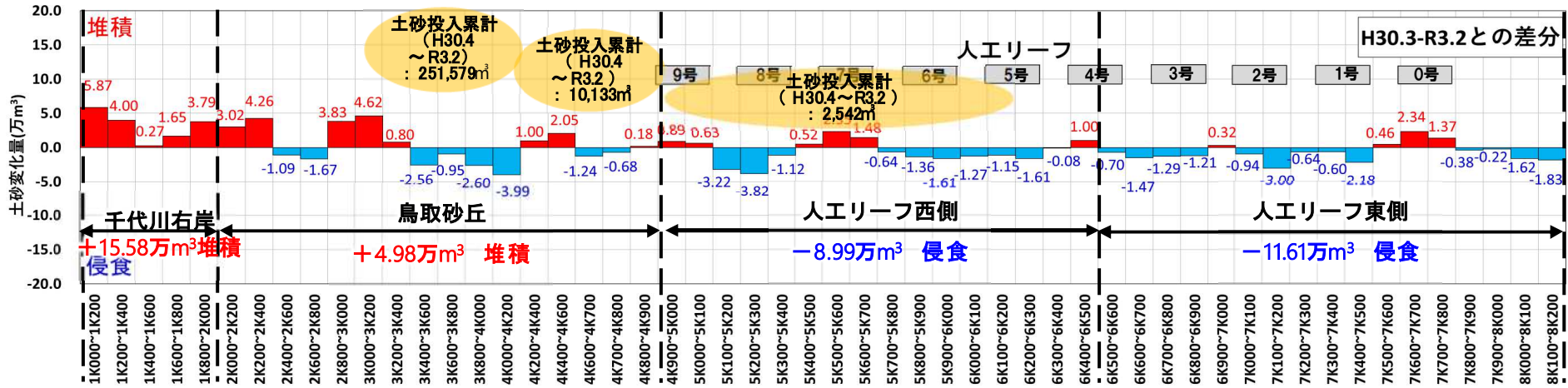
【H30.3とR3.2土砂量比較】

○海岸全体として、土砂量は均衡(±0m³)しており、西側で堆積傾向、東側で侵食傾向が確認される。

【R3.2とR6.3土砂量比較】

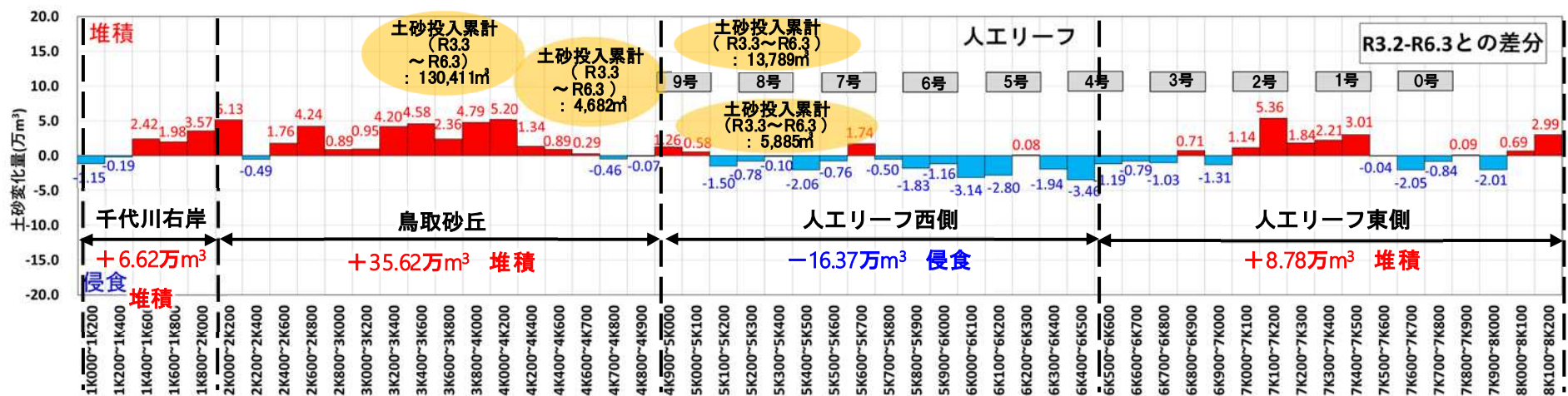
○海岸全体として、約35万m³の堆積傾向にある。

○西側で堆積傾向が確認され、人工リーフの西側(4号~9号の背後)では引き続き侵食傾向が確認される。



平成30年3月と令和3年2月の土砂量比較

※測量基準点~TP.-10mまでの土砂量を算出(移動限界水深(TP.-10m))



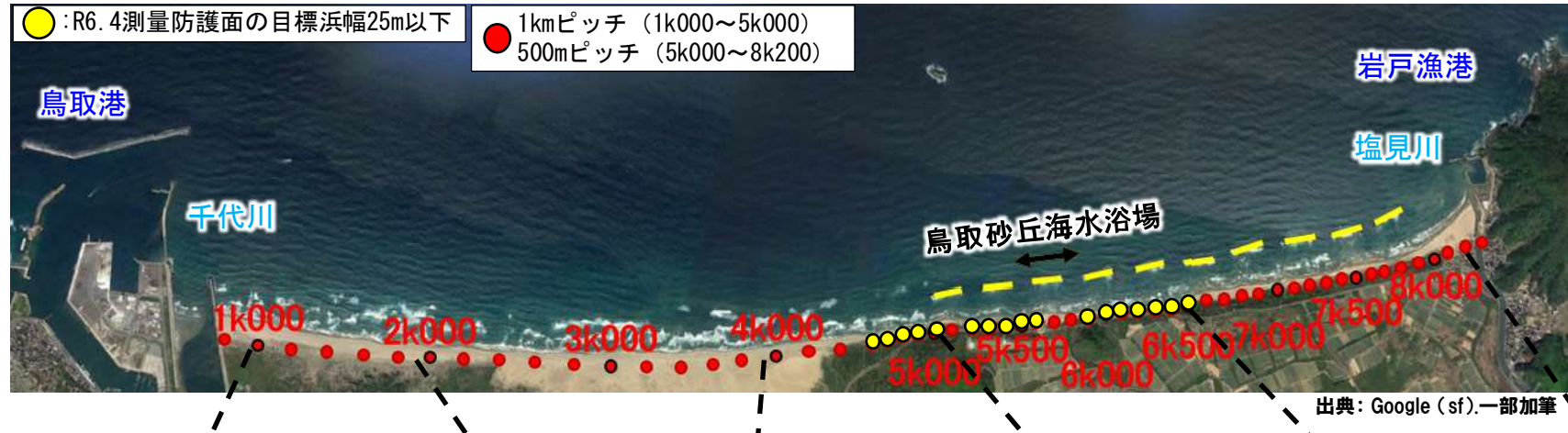
令和3年2月と令和6年3月の土砂量比較

※測量基準点~TP.-10mまでの土砂量を算出(移動限界水深(TP.-10m))

⑥課題と対応方針

【対応方針（案）】

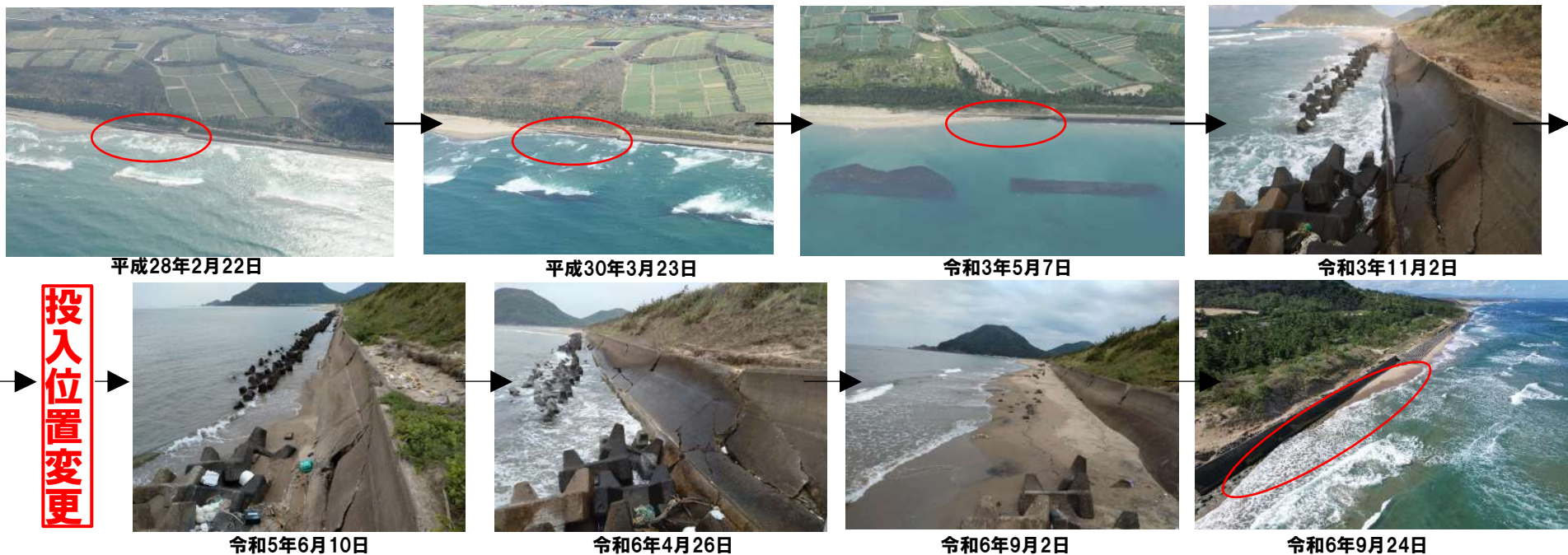
○人工リーフ西側の侵食対策として、令和4年から変更した位置（5k000）への養浜を継続するとともに、国事業による千代川河口掘削土の養浜を継続実施する。また、継続してモニタリングを行う。



	鳥取砂丘西側 (1k000~1k800)	鳥取砂丘前面 (2k000~3k800)	鳥取砂丘東側 (4k000~4k900)	人工リーフ西側 (5k000~6k500)	人工リーフ東側 (6k600~8k200)
施設整備履歴	—	—	—	人工リーフ	人工リーフ
対策実施状況	—	—	土砂投入	土砂投入	—
利用状況	利用なし	利用なし	利用なし	海水浴場(非開設)	利用なし
長期的な地形変化 (H18~R6)	安定傾向	安定傾向	安定傾向	後退傾向	人工リーフ整備により、 安定傾向
短期的な地形変化 (R2~R6)	安定傾向	安定傾向	安定傾向	後退傾向	人工リーフ整備により、 安定傾向
砂浜幅(R6.4)	防護面の目標浜幅(25m) を確保	防護面の目標浜幅(25m) を確保	防護面の目安浜幅を下回っ ている(7箇所中1箇所)	防護面の目安浜幅を下回っ ている(16箇所中14箇所) 利用面の目安浜幅を下回っ ている(16箇所中16箇所)	防護面の目標浜幅(25m)を 確保
問題点・課題	—	—	—	防護面の目標 浜幅(25m)の確保	—
今後の対応方針 (案)	人工リーフ西側の侵食対策として、令和4年から変更した位置（5k000）への養浜を継続するとともに、国事業による千代川河口掘削土の養浜を継続実施する。また、継続してモニタリングを行う。				

出典：Google (sf).一部加筆

○測量結果からは確認できないが、令和4年度からの養浜位置変更により、人工リーフの背後地で一時的に砂浜が形成されるなど、現地では砂浜に若干の変化が見られる。



①現状(航空写真)

千代川左岸³⁰

令和6年5月14日撮影 航空写真



白兔海岸

②現状(サンドリサイクル実績)

【鳥取港】

- 鳥取港から鳥取港西側への土砂投入は関係機関との調整等により令和3（2021）年度以降は実施していない。

【白兎海岸】

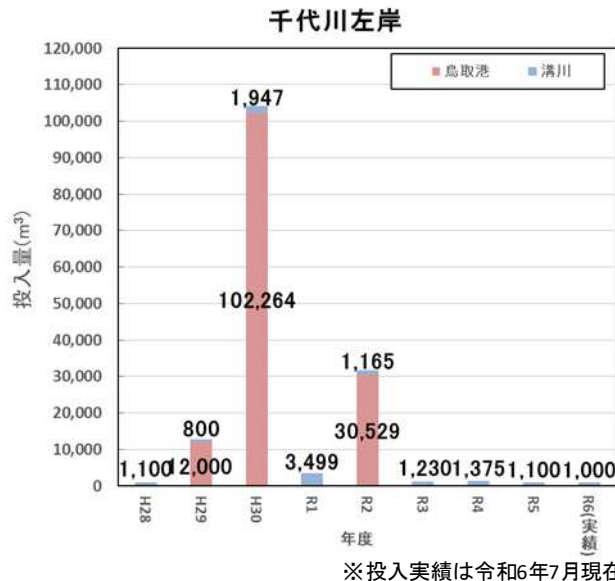
- 溝川の河口閉塞に伴う浚渫が平成28（2016）年度から実施されており、浚渫土を左岸側へ養浜している。近年の土砂投入量は次のとおり。

2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
3,499m ³	1,165m ³	1,230m ³	1,375m ³	1,100m ³

- 平成28年度から令和6年7月までに、累計13,216m³の土砂投入が行われている。



出典: Google (sf).一部加筆



出典: Google (sf).一部加筆

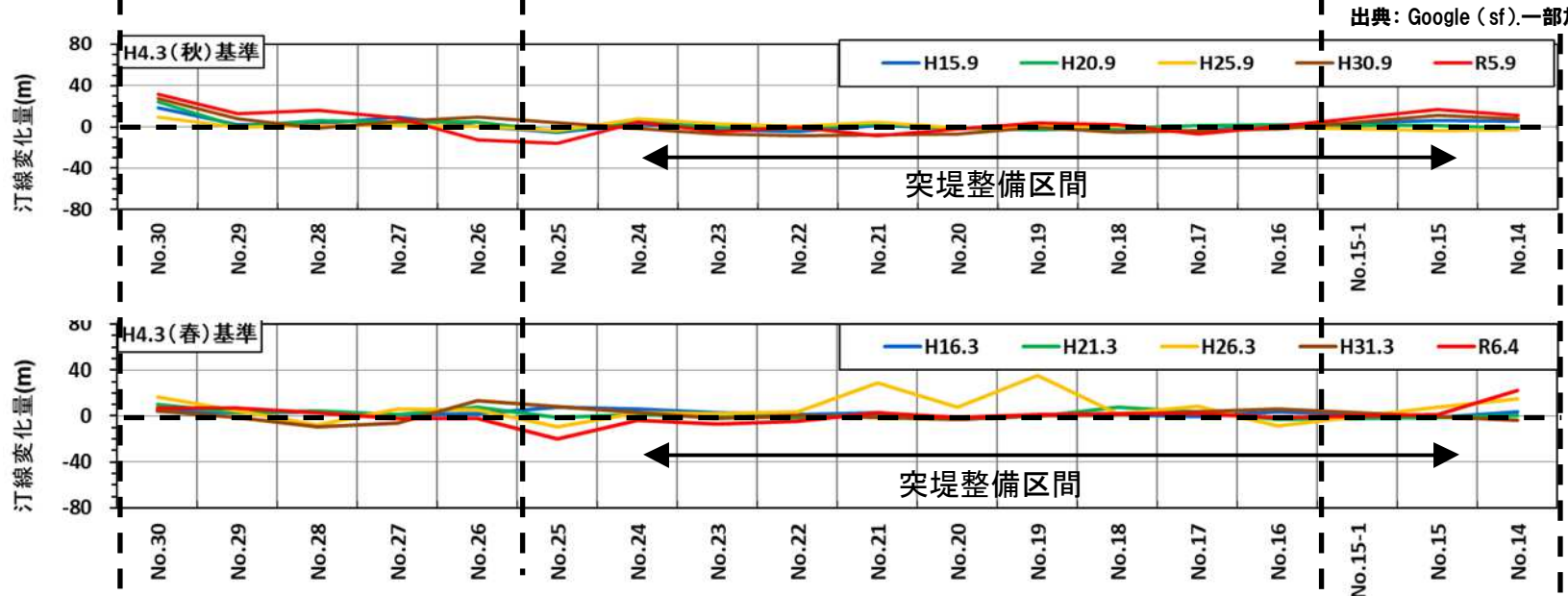
③現状（長期的な汀線変化）

長期的な汀線変化：突堤整備により経年的な汀線変化は少なく安定傾向にあるものの、近年は局所的（No. 25）に汀線後退が見られる。



出典：Google (sf).一部加筆

長期的な汀線変化



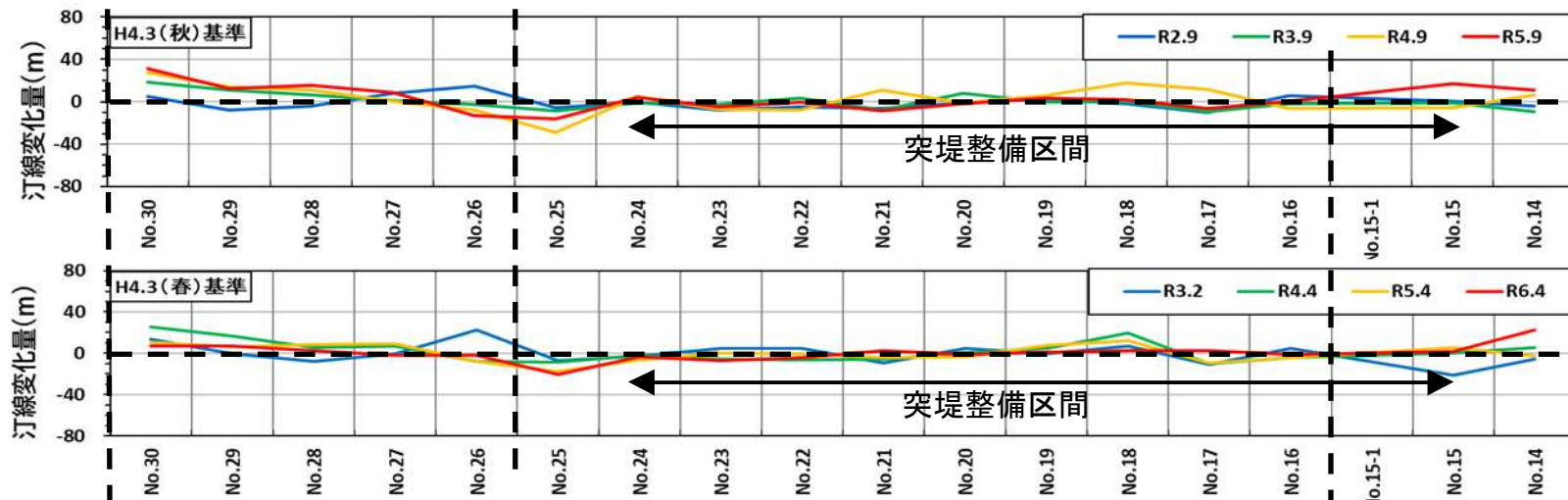
平成4年3月を基準とした長期的な汀線変化

※測量基準年は、保有している測量データの最も古いデータを設定（季節毎）
 ※サンドリサイクル事業はH18より実施

④現状(短期的な汀線変化・砂浜幅)

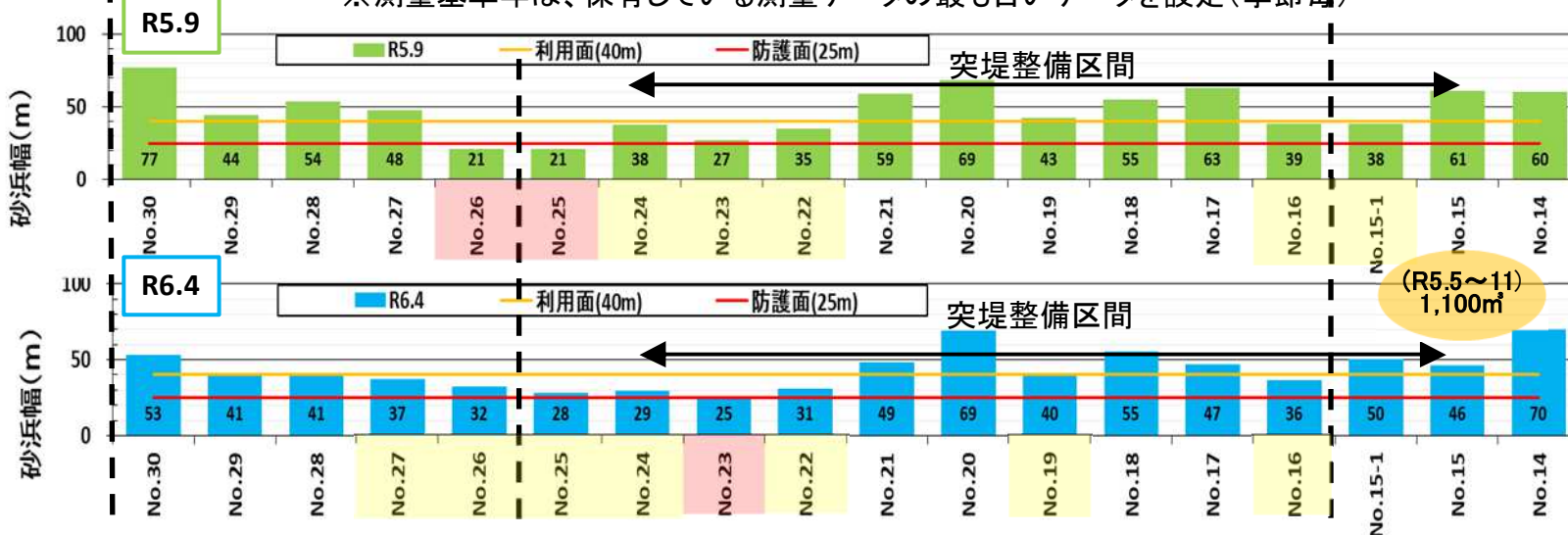
短期的な汀線変化：No. 25では昨年度と同程度の後退が見られる。他地点は汀線変化が少なく 汀線は安定傾向にある。
砂浜幅：一部 (No. 23, 25, 26) で防護面 (25m) を下回っている。(No. 20~26が平面的に凸形状となっており、波の回折による影響が考えられる。)

短期的な汀線変化



平成4年3月を基準とした短期的な汀線変化

※測量基準年は、保有している測量データの最も古いデータを設定(季節毎)



砂浜幅

※測点は200mピッチ

令和5年9月及び令和6年4月測量時の砂浜幅

※赤色ハッチ: 防護面の目標浜幅25m以下
 黄色ハッチ: 利用面の目標浜幅40m以下

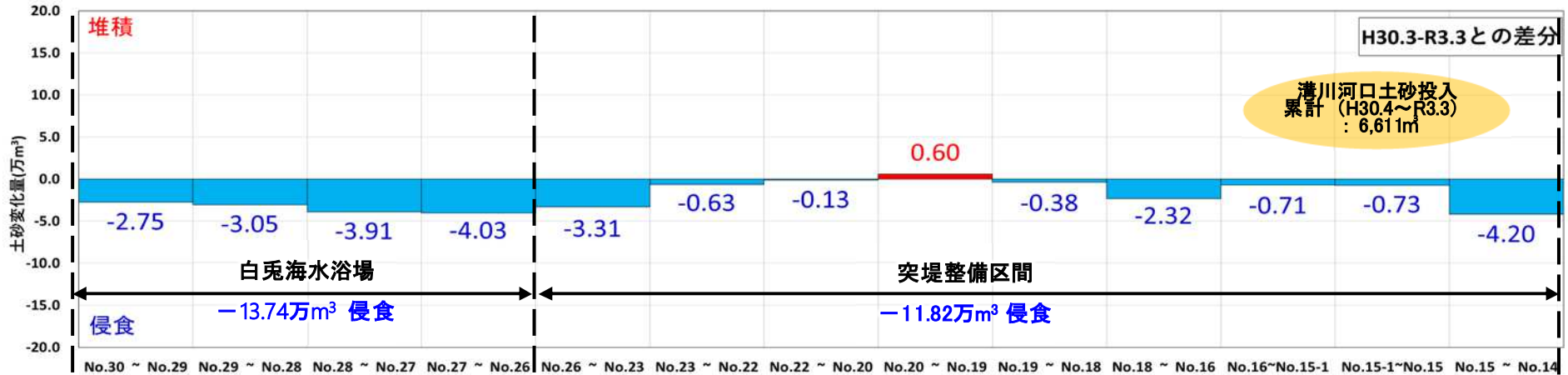
⑤土砂変化分析(中期)

【H30.3とR3.3土砂量比較】

○海岸全体として、約26万m³の侵食傾向にあり、全体的に侵食傾向にある。

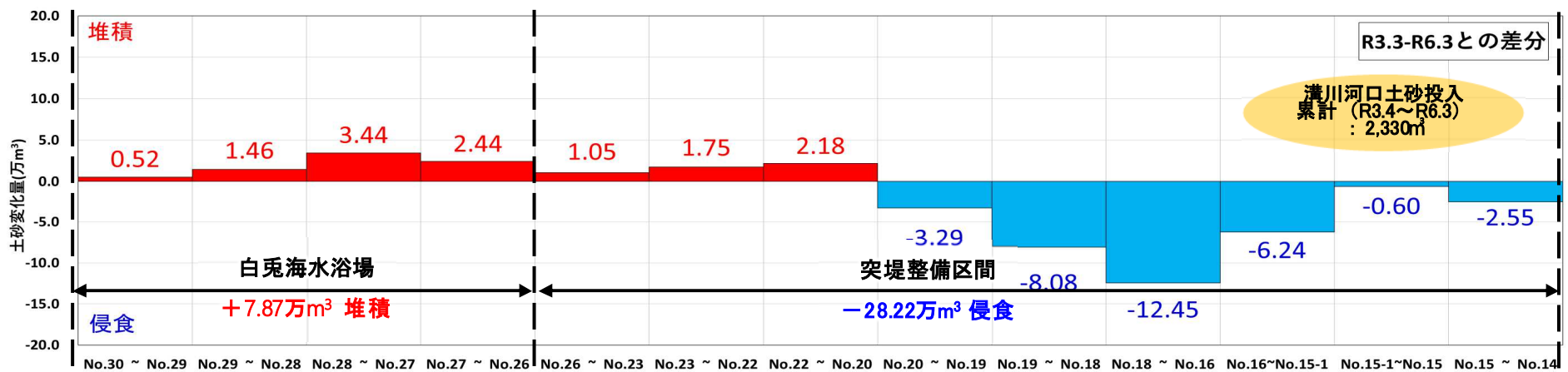
【R3.3とR6.3土砂量比較】

○海岸全体として、約20万m³の侵食傾向にあり、漂砂の下手（西側）では堆積傾向にある。



平成30年3月と令和3年3月の土砂量比較

※測量基準点～TP.-10mまでの土砂量を算出(移動限界水深(TP.-10m))



令和3年3月と令和6年3月の土砂量比較

※測量基準点～TP.-10mまでの土砂量を算出(移動限界水深(TP.-10m))

⑥課題と対応方針

【対応方針（案）】

○R6～R9にかけて千代川の河口掘削土が伏野海岸沖合へ養浜される予定となっているが、土砂変化量は減少傾向にあることから、鳥取港から賀露西浜海岸への土砂供給を引き続き検討する。



出典：Google (sf).一部加筆

	白兎海岸	突堤整備区間	溝川左岸側
施設整備履歴	—	突堤	—
対策実施状況	—	—	土砂投入
利用状況	海水浴場（非開設）	—	—
長期的な地形変化 (H4～R6)	突堤整備により、安定傾向		
短期的な地形変化 (R2～R6)	安定傾向		
砂浜幅 (R6. 4)	防護面の目標浜幅 (25m) 確保	防護面の目標浜幅 (25m) を一時的に下回っている (10箇所中1箇所)	防護面の目標浜幅 (25m) 確保
問題点・課題	局所的な砂浜幅の減少	局所的な砂浜幅の減少	—
今後の対応方針 (案)	・R6～R9にかけて千代川の河口掘削土が伏野海岸沖合へ養浜される予定となっているが、土砂変化量は減少傾向にあることから、鳥取港から賀露西浜海岸への土砂供給を引き続き検討する。		

①現状(航空写真)

気高海岸 36

令和6年12月2日撮影

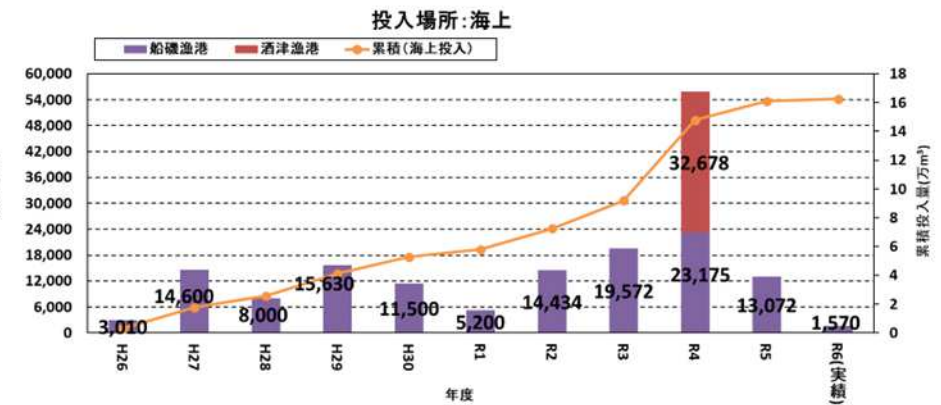
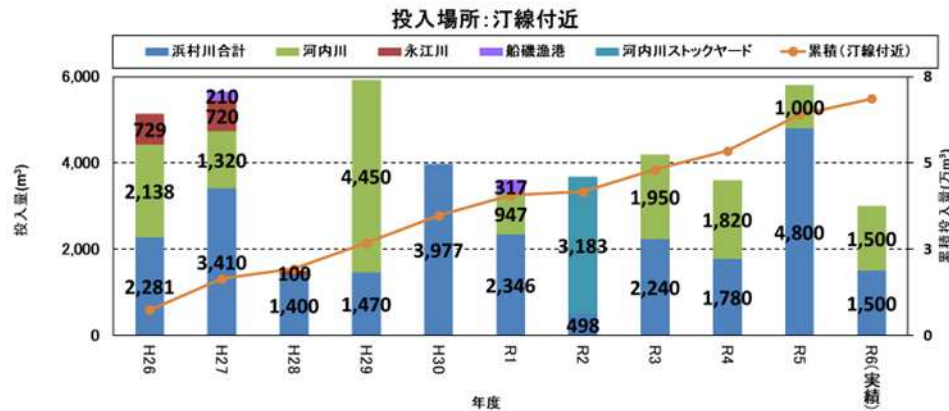


②現状(サンドリサイクル実績)

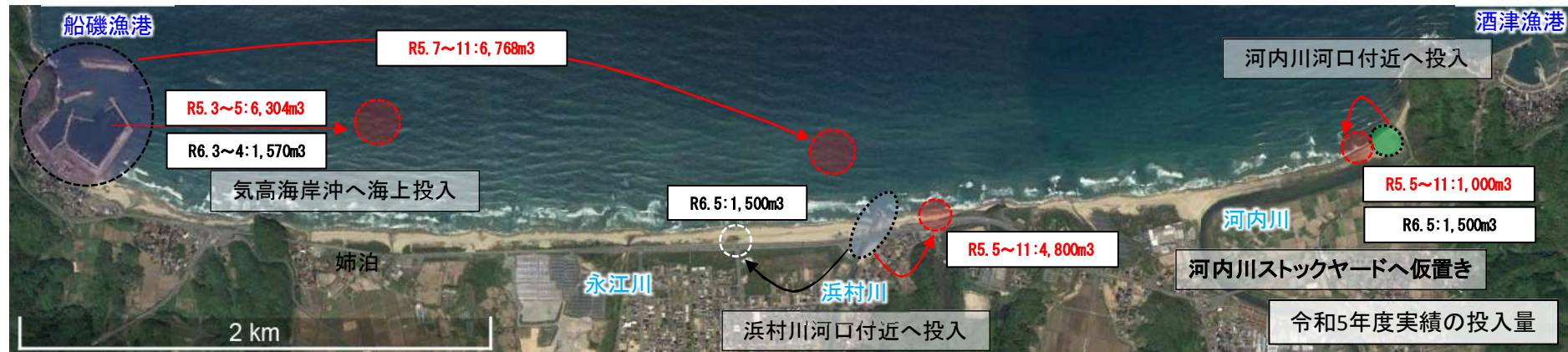
- 気高海岸では、平成26(2014)年から航路浚渫に伴う海上養浜、河口閉塞に伴う陸上養浜が実施されており、養浜量は増加傾向にある。

養浜先	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
船磯漁港→気高海岸沖合	5,200m ³	14,434m ³	19,572m ³	23,175m ³	13,072m ³
浜村川河口→浜村左右岸	2,346m ³	498m ³	2,240m ³	1,780m ³	4,800m ³

- 令和5年度から船磯漁港からの浚渫土の一部が、漂砂上手の浜村川左岸沖合へ養浜されている。
- 平成26年度から令和6年7月までに、約23万m³累積陸上投入6.9万m³、累積海上投入16.2万m³が行われている。

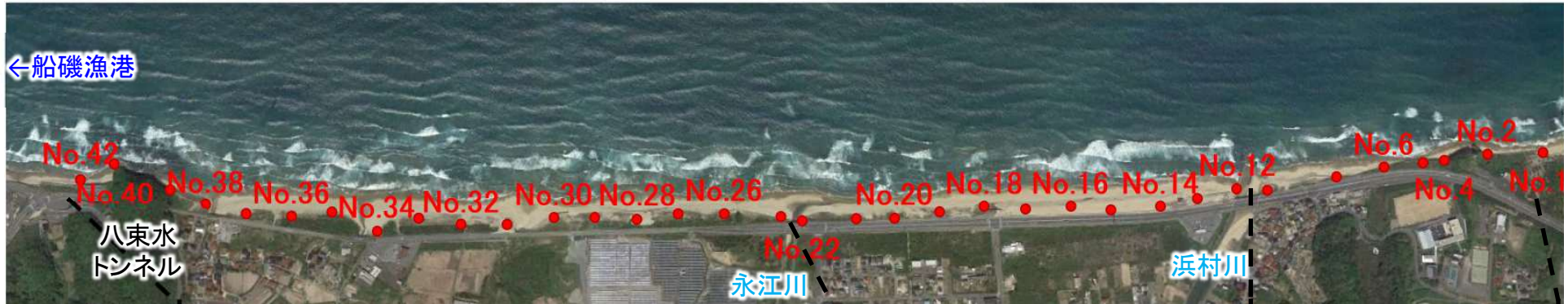


※投入実績は令和6年7月現在

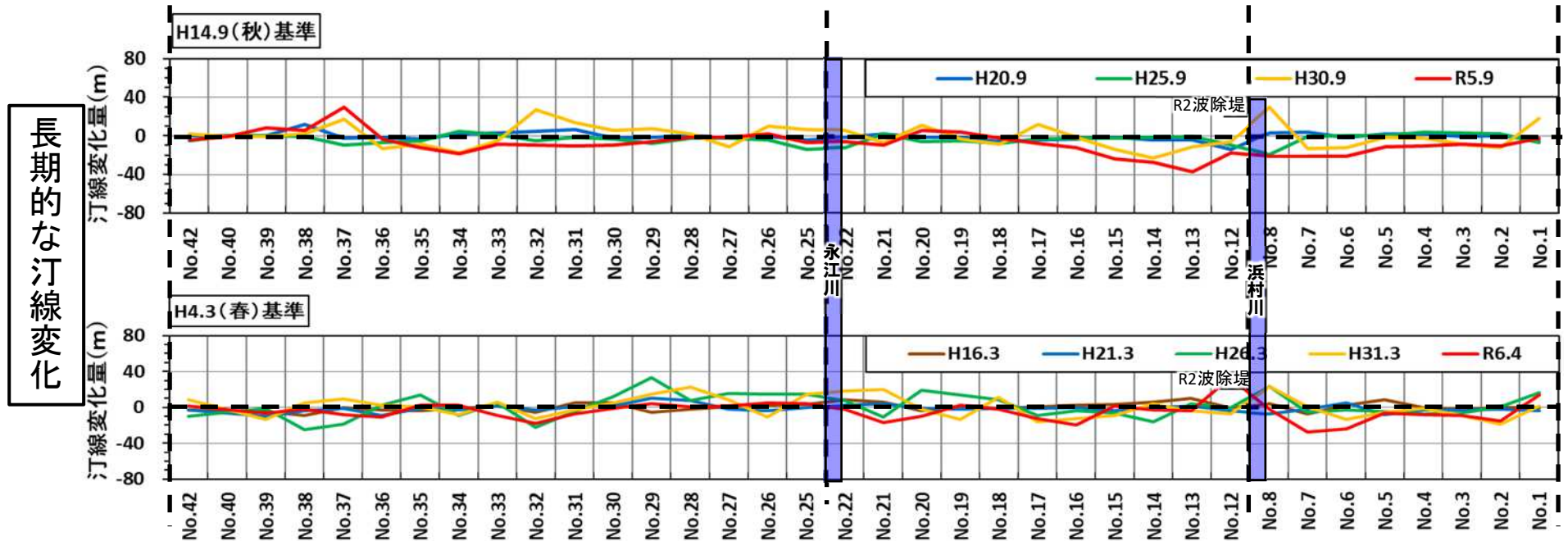


③現状(長期的な汀線変化)

長期的な汀線変化：経年的な汀線変化は全体的には少なく安定傾向を示しているが、近年浜村川左右岸にて、汀線後退が見られる。(左岸) No. 12~No. 17付近、(右岸) No. 2~No. 8付近



出典：Google (sf).一部加筆



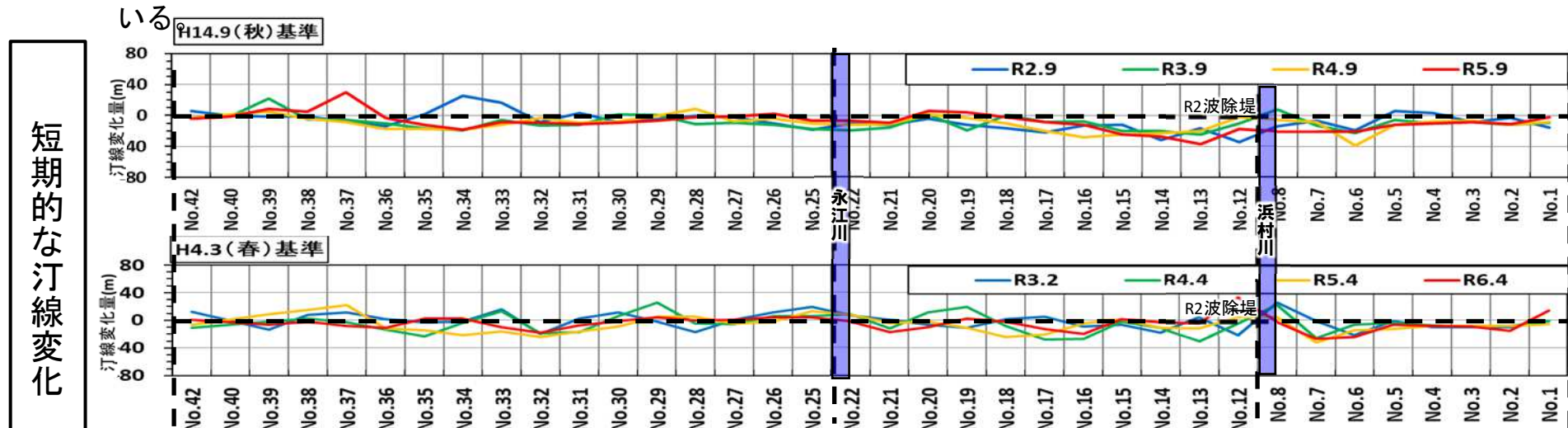
平成4年3月及び平成14年9月測量を基準とした長期的な汀線変化

※測量基準年は、保有している測量データの最も古いデータを設定(季節毎)

④現状(短期的な汀線変化・砂浜幅)

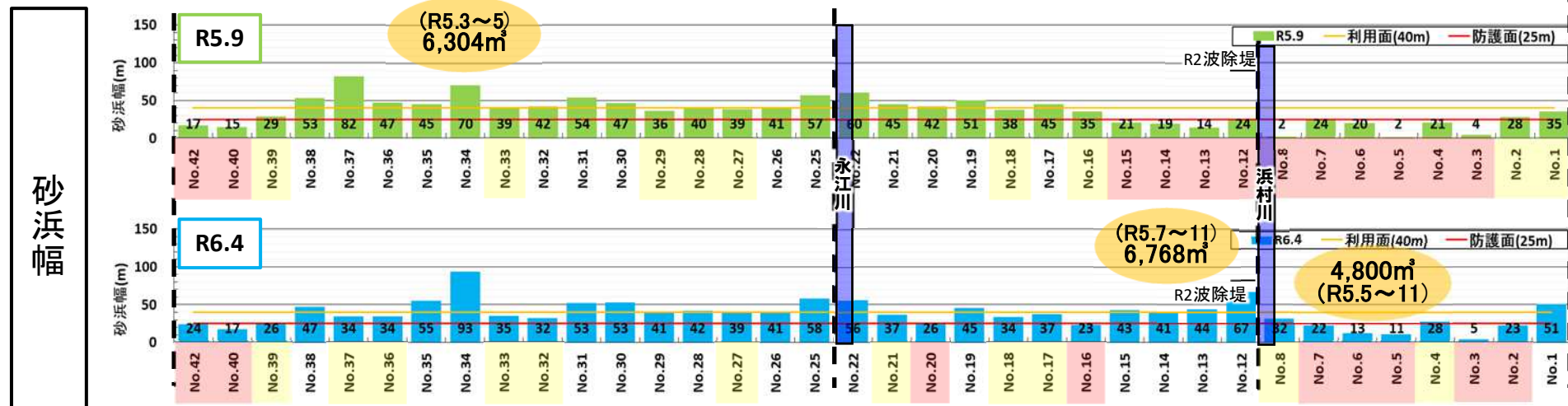
短期的な汀線変化：秋季は浜村川左右岸、春季は浜村川右岸において汀線が後退傾向にあり、その他の区間は概ね基準線と同程度である。

砂浜幅：八束水トンネル付近 (No. 40~42) 及び浜村川右岸 (No. 3、No. 5~7) において、通年で防護の目安値を下回っている



平成4年3月及び平成14年9月測量を基準とした短期的な汀線変化

※測量基準年は、保有している測量データの最も古いデータを設定(季節毎)



令和5年9月及び令和6年4月測量時の砂浜幅

※赤色ハッチ: 防護面の目標浜幅25m以下
黄色ハッチ: 利用面の目標浜幅40m以下

※測点は100mピッチ

短期的な汀線変化

砂浜幅

⑤土砂変化分析(中期)

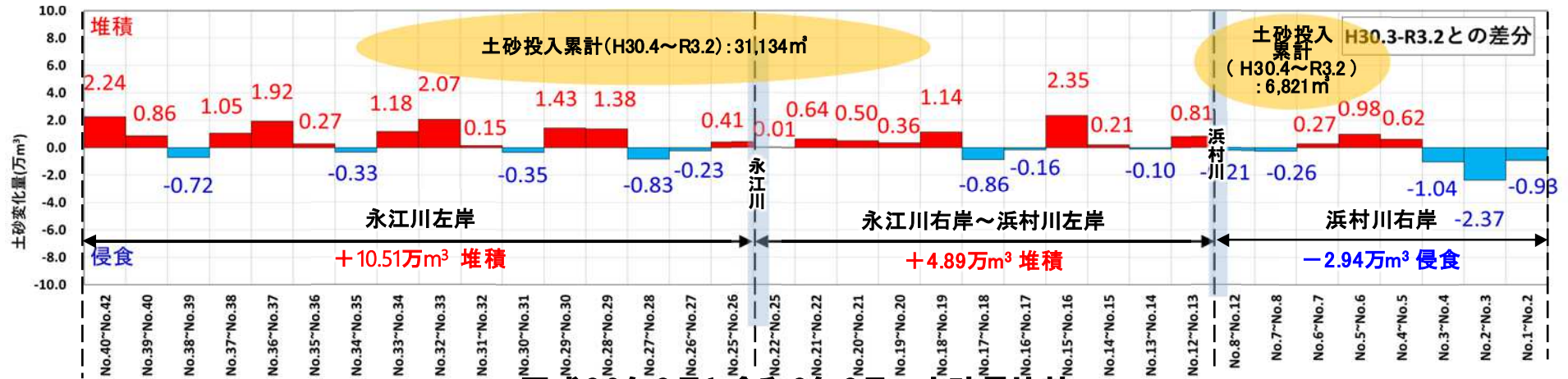
【H30.3とR3.2土砂量比較】

○海岸全体として、約12万m³の堆積傾向にあり、漂砂下手の浜村川以西では概ね堆積傾向にある。

【R3.2とR6.4土砂量比較】

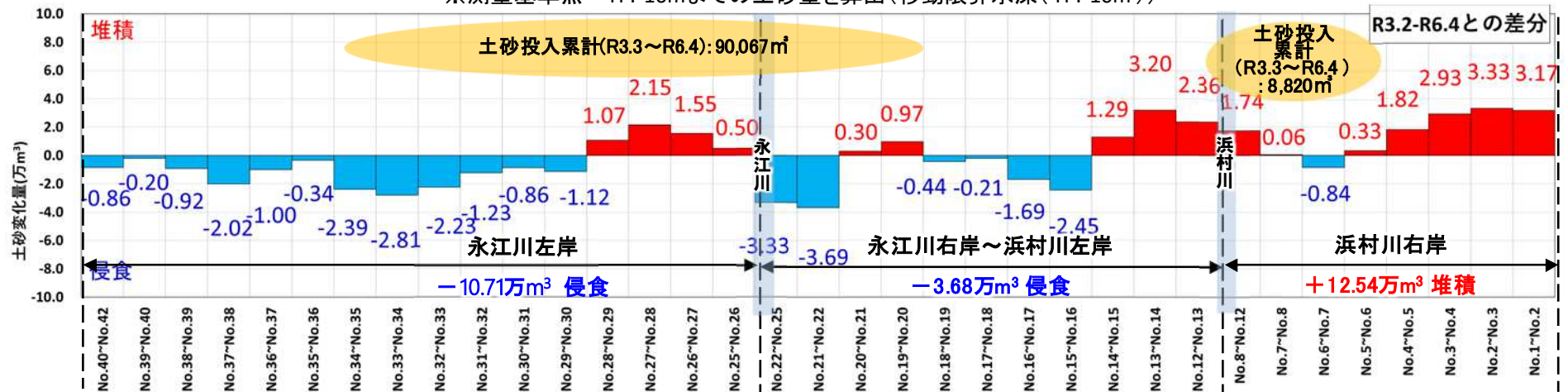
○海岸全体として、約2万m³の侵食傾向にあり、漂砂下手の浜村川以西では概ね侵食傾向にある。

○浜村川左岸では、令和2年1月の冬季風浪により国道9号が被災したが、令和3年10月に完成した波除堤の効果により若干の堆積傾向にある。



平成30年3月と令和3年2月の土砂量比較

※測量基準点～TP.-10mまでの土砂量を算出(移動限界水深(TP.-10m))



令和3年2月と令和6年4月の土砂量比較

※測量基準点～TP.-10mまでの土砂量を算出(移動限界水深(TP.-10m))

⑥課題と対応方針

【対応方針（案）】

○令和5年度から船磯漁港の浚渫土を浜村川左岸沖合へ、浜村川河口浚渫土を浜村川右岸へ養浜することとしており、引き続きその位置へ養浜を継続するとともにその効果をモニタリングする。



出典：Google (sf).一部加筆

	八束水トンネル～永江川左岸側	永江川右岸～浜村川左岸	浜村川右岸
施設整備履歴	—	波除堤整備 (R2年浜村川左岸緊急対策)	—
対策実施状況	土砂投入		
利用状況	利用なし		
長期的な地形変化(H14～R6)	安定傾向	浜村川左岸で後退傾向	浜村川右岸で後退傾向
短期的な地形変化(R1～R6)	安定傾向	浜村川左岸で後退傾向(但し、左岸の波除堤背後では施設により回復・安定傾向)	浜村川右岸で後退傾向
砂浜幅(R6.4)	一部、防護面の目標浜幅25mを下回る(17箇所中2箇所)(地形による影響有)	一部、防護面の目標浜幅25mを下回る(11箇所中2箇所)	一部、防護面の目標浜幅25mを下回る(8箇所中5箇所)
問題点・課題	—	浜村川左岸での汀線後退	浜村川右岸での汀線後退
今後の対応方針（案）	令和5年度から船磯漁港の浚渫土を浜村川左岸沖合へ、浜村川河口浚渫土を浜村川右岸へ養浜することとしており、引き続きその位置へ養浜を継続するとともにその効果をモニタリングする。		

①現状(航空写真)

青谷海岸 42

令和6年12月2日撮影

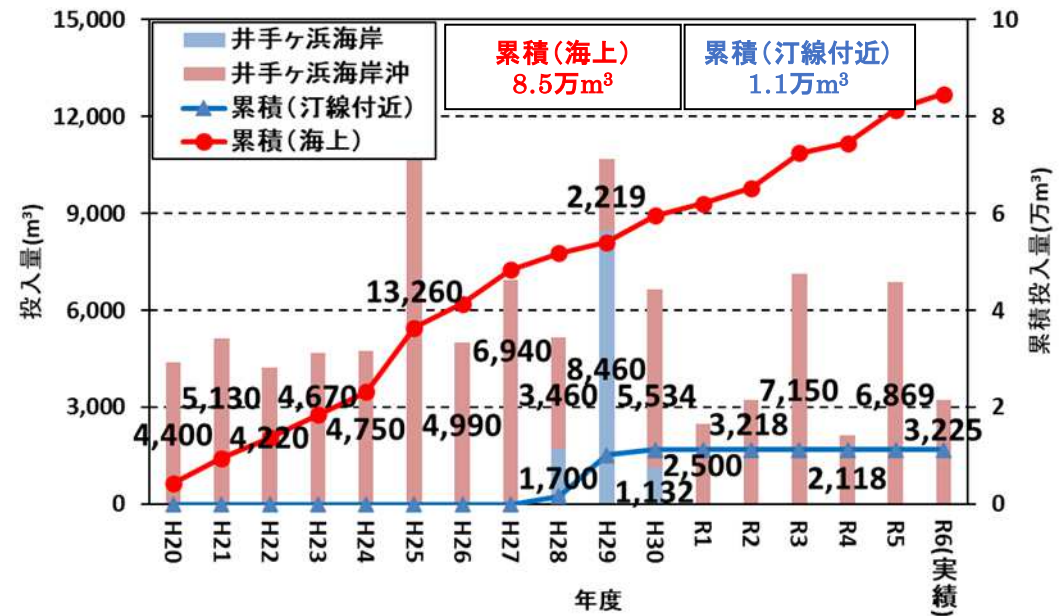


②現状(サンドリサイクル実績)

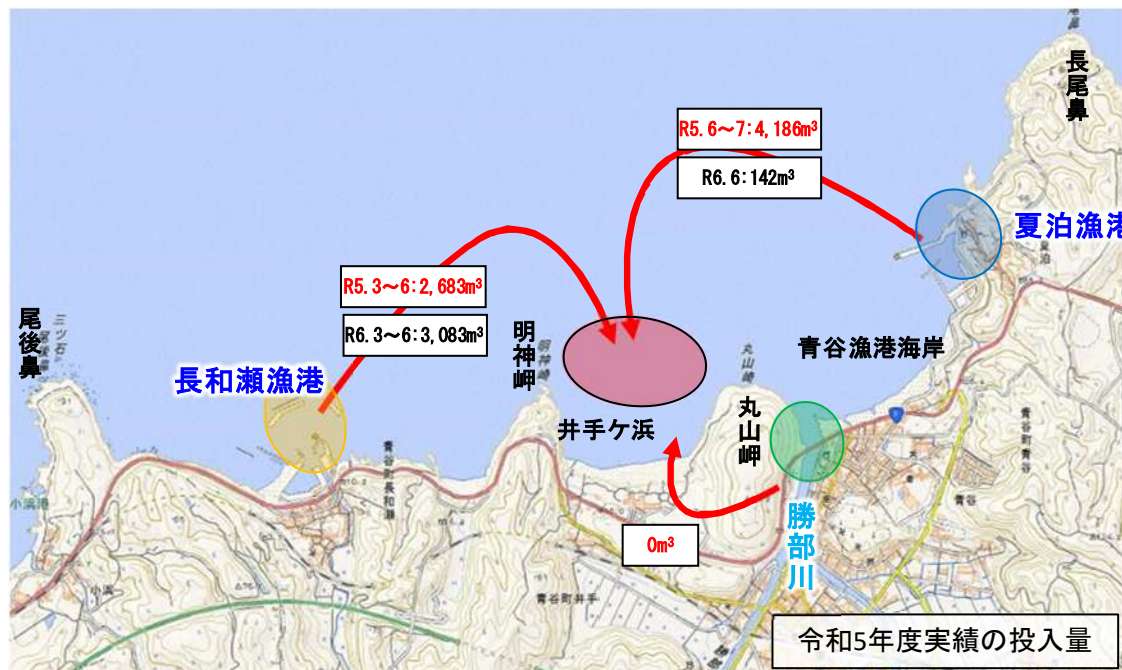
- 青谷漁港海岸では、平成20(2008)年から主に井手ヶ浜沖に土砂投入が行われており、近年の土砂投入量は次のとおり。

2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
2,500m ³	3,218m ³	7,150m ³	2,118m ³	6,869m ³

- 平成20年から令和6年7月までに、累積海上投入8.5万m³、累積陸上投入1.1万m³が行われている。

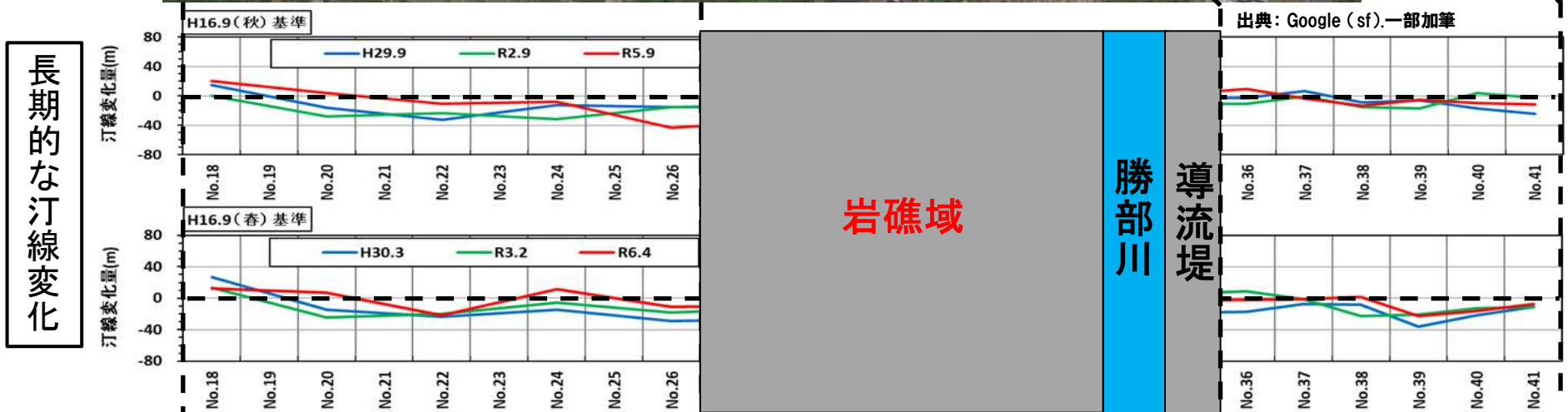


※投入実績は令和6年7月現在



③現状(長期的な汀線変化)

長期的な汀線変化：井手ヶ浜では、局所的な後退（No.26）が見られるものの、他地点は汀線回復傾向が見られる。
 青谷漁港海岸では、局所的な後退（No.39）が見られるものの、経年変化は小さい傾向にある。



平成16年9月測量を基準とした長期的な汀線変化

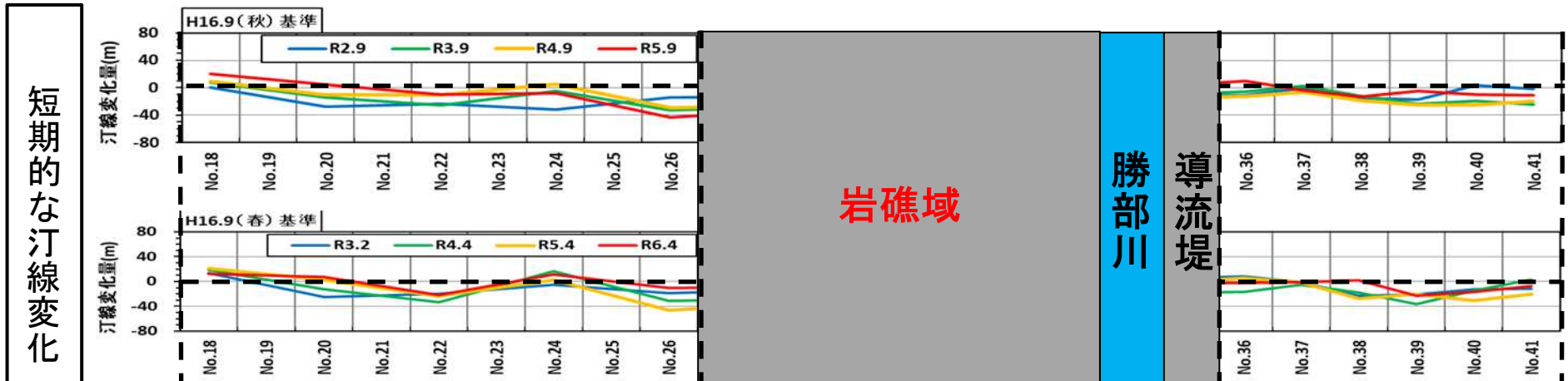
※測量基準年は、保有している測量データの最も古いデータを設定(季節毎)

④現状(短期的な汀線変化・砂浜幅)

短期的な汀線変化：井手ヶ浜では、秋に局所的な後退（No. 26）が見られたものの、春には汀線位置が回復し安定傾向が見られる。

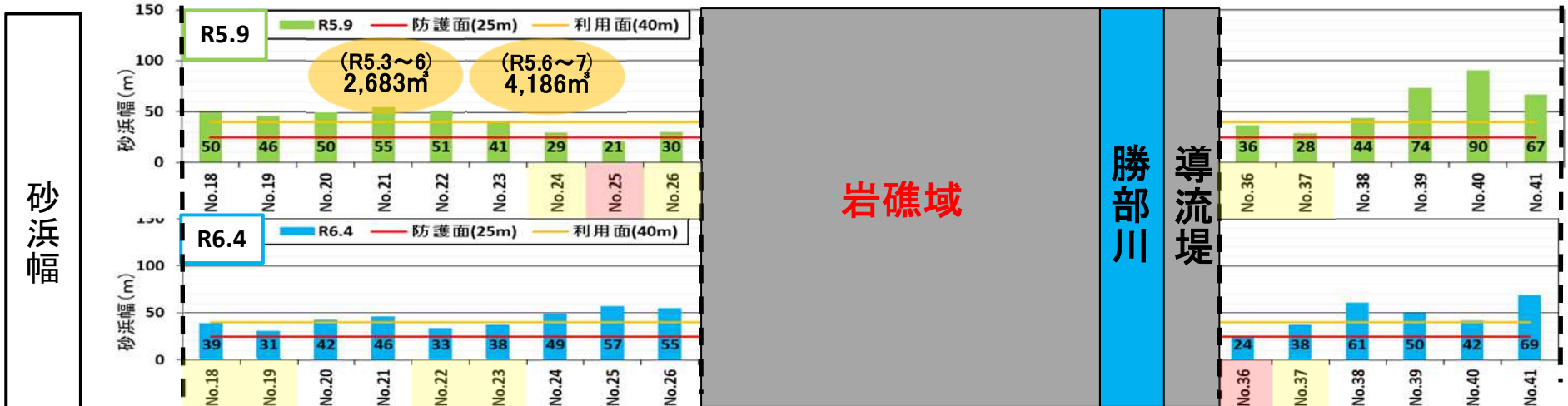
青谷漁港海岸では、基準年と比較し、No. 39～40付近の汀線に後退傾向が見られる。昨年度よりも回復傾向である。

砂浜幅：青谷漁港海岸では、R6（春）にNo. 36で防護面（25m）を下回っている。



平成16年9月測量を基準とした短期的な汀線変化

※測量基準年は、保有している測量データの最も古いデータを設定(季節毎)



※No. 18～26の測点は50mピッチ
No. 36～41の測点は100mピッチ

令和5年9月及び令和6年4月測量時の砂浜幅

※赤色ハッチ: 防護面の目標浜幅25m以下
黄色ハッチ: 利用面の目標浜幅40m以下

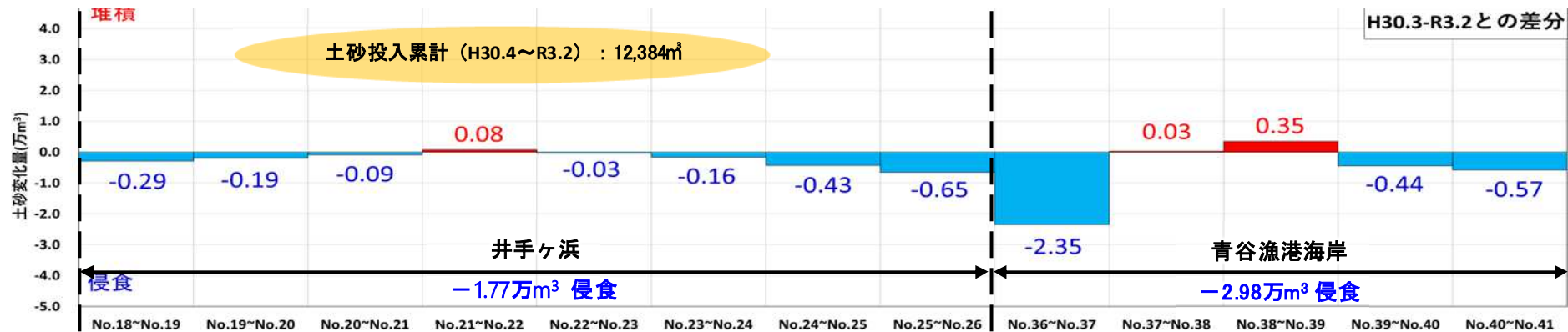
⑤土砂変化分析(中期)

【H30. とR3. 2土砂量比較】

- 井手ヶ浜では、土砂投入の効果等により土砂変化量は小さい傾向にある。
- 青谷漁港海岸では、勝部川右岸付近で侵食傾向にあり、その他の区間では変化量は小さい。

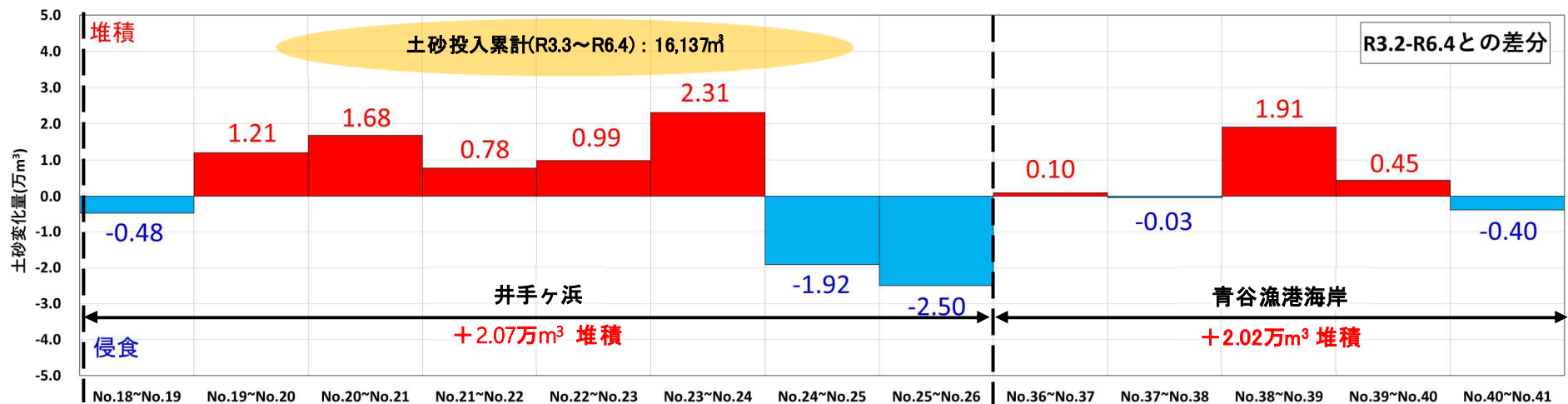
【R3. 2とR6. 3土砂量比較】

- 井手ヶ浜では、土砂投入の効果等により堆積傾向にある。
- 青谷漁港海岸では、2万m³の堆積傾向にある。(出水による河口砂州のフラッシュ等が想定される。)



平成30年3月と令和3年2月の土砂量比較

※測量基準点~TP.-10mまでの土砂量を算出(移動限界水深(TP.-10m))



令和3年2月と令和6年4月の土砂量比較

※測量基準点~TP.-10mまでの土砂量を算出(移動限界水深(TP.-10m))

⑥課題と対応方針

【対応方針（案）】

- 夏泊漁港と長和瀬漁港から井手ヶ浜へのサンドリサイクルを継続して実施する。
- 青谷漁港海岸で一部汀線の後退傾向とあわせて、防護面の目標浜幅を下回っていることから、勝部川河口堆積土の養浜を引き続き地元と調整する。



出典：Google (sf).一部加筆

	井手ヶ浜海水浴場	青谷漁港海岸
施設整備履歴	—	—
対策実施状況	土砂投入	—
利用状況	海水浴場(非開設)	利用なし
長期的な地形変化(H16~R6)	回復傾向	回復傾向
短期的な地形変化(R2~R6)	回復傾向	回復傾向
砂浜幅(R6.4)	防護面の目標浜幅(25m)を確保 利用面の目標浜幅(40m)を下回っている(9箇所中4箇所)	防護面の目標浜幅(25m)を下回っている(6箇所中1箇所) 利用面の目標浜幅(40m)を下回っている(6箇所中2箇所)
問題点・課題	利用面の砂浜幅確保	防護面の砂浜幅確保
今後の対応方針	夏泊漁港と長和瀬漁港から井手ヶ浜へのサンドリサイクルを継続して実施する。	青谷漁港海岸で一部汀線の後退傾向とあわせて、防護面の目標浜幅を下回っていることから、勝部川河口堆積土の養浜を引き続き地元と調整する。